

## 武藏野日曜集会

## まことの牧者

——ヨハネ伝第10章1～18節——

小池辰雄

1995年6月11日

キリストの門人 キリストの直結者 十字架の死 神秘を体感する キリストからの圧倒力

## 【ヨハネ10・1～18】

1 『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻おりに門より入らずして、他より越ゆる者は盜人ぬすびとなり、強盜ひょうどなり。<sup>2</sup>門より入る者は、羊の牧者ひつじかなり。<sup>3</sup>門守かどもりは彼のために開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽つきいだす。<sup>4</sup>悉悉とく其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従つうなり。<sup>5</sup>他の者には従わず、反つて逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』<sup>6</sup>イエスこの譬たとえを言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。

7 この故にイエス復またいい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。8 すべて我より前に來りし者は、盜人ぬすびとなり、強盜ひょうどなり、羊は之に聽かざりき。<sup>9</sup>我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入でいりをなし、草を得べし。<sup>10</sup>盜人のきたるは盜み、殺し、亡きさんとするの他なし。わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊に得しめん為なり。<sup>11</sup>我は善き牧者ひつじかなり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。<sup>12</sup>牧者ならず、羊も己おのがものならぬ雇人おおかみは、豺狼おおかみのきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、——豺狼は羊をうばい且ちらす——<sup>13</sup>彼は雇人やといびとにてその羊を顧みぬ故なり。<sup>14</sup>我は善き牧者ひつじかにして、我を知り、我のものは我を知る、<sup>15</sup>父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨つ。<sup>16</sup>我には亦この檻おりのものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者ひつじかとなるべし。<sup>17</sup>之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたたび生命を得んために生命を捨つる故なり。<sup>18</sup>人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我は之をすつる権あり、復これを得る権あり、我この命令をわが父より受けたり』

## ●キリストの門人

人間の関係というものは第三者的ではダメなんです。一対一の、一人称・二人称の関係です。第三者のことはゴタゴタ言うべきものではない。その人のことを特に讃めるのは良いけれ



ども、

「あの人があの人がどうだ、この人がどうだ」

と、これが人間関係をくずします。我々の交わりというのは、本当にキリストとの縦の関係がしつかりしていれば、横のそいつた下らない言説がなくなるわけです。キリスト者というものは、そういう意味において、はつきりしていただきたいと思います。やはり、集会というものは大事なものですから、他のいろいろなことがあるでしょうけれども、それを乗り越えて集会に来ていただきたいと思います。

私は、自分のことを言うとおかしいですが、内村鑑三、藤井武の集会には欠席したことがない。そういうようにして集会をよく守つたわけですが、やはり、そのことは大事なことだつたと思います。私の兄小池政美もそのようにして集会には必ず行つていました。そして、午後は一人でどこか郊外へ散歩していました。やはり、聖日、日曜というのは特別な日ですから、この世のことは捨ててかからないと。それは律法ではない。福音の氣持です。

それでは、ヨハネ伝第10章に入ります。羊のことは、私は羊を飼つたことがないから知りませんが、犬はやはりそのように忠実な動物です。犬は本当に主人をよく知つていますし、それに従う。その点では、羊と犬とは非常に似ています。

### 1 『まことに誠に汝らに告ぐ、

「まことに誠に汝らに告ぐ」とよく出てくる。イエスは本当に大事なことを仰るときには、「まことに誠に」と仰る。これはもともと「アーメン」という字からくる。

### 羊の檻おりに門より入らずして、他より越ゆる者は盜人ぬすびとなり、強盜なり。

この頃、「オウム真理教」の妙なことが伝わつてますが、あのようなのは正にこの言葉に似合うような悪者です。傲慢の靈、サタンの手下です。傲慢の靈はみなサタン的なんです。傲慢の象徴は「獅子（ライオン）」です。ライオンやトラだとかいう動物は、猛獸だと猛禽だとかは弱肉強食で、なんともいやらしいですね。

「門人」という言葉があります。我々はキリスト直結の門人なんだ。キリストの門人です。キリストの直弟子たちと質的には同じです。本当にキリストの十字架と聖靈を受けていれば、質的にキリストの門人たちと同じと言つことができる。

### ●キリストの直結者

キリストの「十字架と復活と聖靈」の事態は絶対に離してはいかん。「キリスト」と言えば、彼の十字架の贖罪と、彼の復活の靈的な生命と、それから降だしてくださつた聖靈と、この三つがある。

「イエス・キリスト、主さま」

と言うときには、その三つの内容が渾然として入つていなくてはいかん。そういうキリストの中に自分を投げ入れる、一つになる。そういう次元の豊かなキリストの中にいるのが



本当の「しんこう」（神交）なんだ。だから、「信仰」という言葉がダメだ。仰いでいたつてダメです、信入しなければ。「神交」、神的な交わりです。これがキリストが喜びたもうところの、信仰ならざる神交です。そういう靈的現実です。いわゆる「信仰」というのは、いつまでたつても観念でダメです。

日本の総理大臣というのは聖書を読まなければダメだ。そして、大乗的な判断のできるような人でなければ。いわゆる民主主義というのは、

「どうだ、こうだ」

と相談ばかりしていてしようがない。そうでなくて、本当に福音的な権威と信念をはつきりもつてことに当たらなくては。アメリカのリンカーン、ドイツのビスマルク、イギリスのグラッドストーン、これは19世紀の三大政治家です。彼らは本当に聖書を身につけた人たちです。

「本当の政治家は古典を身につけていなければダメだ」

とプラトンが言っている。古典的な教養がなければ本当の政治家にはなれない。日本の政治家は、しつかりと古典を勉強してもらいたい。なにしろ、聖書を特別な本だと思つているから困る。これは絶対に権威をもつたところの、また、これくらい面白い本はない。聖書は、特に新約聖書は大変な本です。旧約聖書では預言書と詩篇です。特にイザヤ書の40章以下は素晴らしい。

とにかく、我々は、牧者に羊が直結しているように、我々の牧者であるキリストに直結して行く。いわゆる「信仰」ではない。キリストの直結者、キリストの直弟子者です。

「我々は二千年前のお弟子さんたちと同じ、キリストの直弟子です」

という意識と自覚をもつてやつてください。いわゆる「クリスチヤン」ではない。

<sup>2</sup>門より入る者は、羊の牧者なり。<sup>3</sup>門守は彼のために開き、羊はその声をきき、

彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。

よくしたものですね。

<sup>4</sup>悉とく其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて

従うなり。

我々はキリストの声を知る。聖書を読みながら、読んでいるのではない、聞いている。御声を聞いている。

「我々は聖書を聞いています」

という。我々は聞きながら歩いている。聖書を読んで、

「その意味がどうだこうだ」

ではない。聖書の現実に自分を入れて、聞いて歩く。捕まつて歩く、捕まえられて歩く。

10章の始めの方の本当の気持はそういうわけです。

<sup>5</sup>他の者には従わず、反つて逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』<sup>6</sup>イエス



この譬たとえを言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。  
そうでしょうね。

### ●十字架の死

イエスさまは神一切であつたから、

「我を見し者は父を見しなり。われ何事をも為しあたわず。自分は何者でも無い、何もできない」

と。ヨハネ伝7章でも言われた。

「イエス答えて言い給う『わが教おしえはわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。』（ヨハネ7・16）

自分で語つてゐるのではなく、「遣し給いし者」の御声によつて語つてゐるだけだと。

<sup>7</sup>この故にイエス復またい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。

イエスは門だと。私たちもキリストの門下おとしです。

<sup>8</sup>すべて我より前に來りし者は、盜人ぬすびとなり、強盜なり、羊は之に聴かざりき。

<sup>9</sup>我は門おとしなり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。<sup>10</sup>盜人のきたるは盜み、殺し、亡さんとするの他なし。わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。

救いと滅びという、非常なコントラストですね。

<sup>11</sup>我は善き牧者ひつじかいなり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。

もう、十字架の死のことをキリストは意識しておられた。生命を捨て、そして生命を与えるんです。

<sup>12</sup>牧者ならず、羊も己おのがものならぬ雇人やとひとは、豺狼おおかみのきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、——豺狼は羊をうばい且ちらす——<sup>13</sup>彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。<sup>14</sup>我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、

<sup>15</sup>父の我を知り、我の父を知るが如し、神さまとキリストの関係、キリストとこの我々の関係、これは同じだと言う。

我は羊のために生命を捨つ。<sup>16</sup>我には亦この檻おりのものならぬ他の羊あり、

これはちゃんと知つていらつしやる。非常に広い愛ですから。

之をも導かざるを得ず、

これはみな御靈の導きで導かれる。歴史的にそういうわけです。キリストはその当時の二千年前と今も同じこと、靈的なキリストが我々を同じように導いて助け、また我々を通して人を助ける。助けられた者は人を助けなかつたらダメなんです。伝道というのはそういうことです。ただ語ることではない。具体的に人助けをする。愛するとはそのことです。こには特に



と書いてある。

「ひとりの牧者となるべし」

くださる。宗教の神秘はそういうところにある。

●神秘を体感する

神秘というの説明できない。説明のできるものは神秘ではない。身体で感ずる人、体感する人、そういう人でなければこの神秘の世界はわからない。これは柳宗悦（むねよ）創始者1889～1961）もそういうことを言っています。私が無教会にいたときには、この「神秘」という言葉は無教会は嫌いだつた。

と、どうまでも

信仰

と言つていた。ところが、本業のギリストとの交わりは神秘なんです。西洋の第一級、うるゝは超一級の文豪はこう、うのを加つてゐる。

西洋の第一級 あるいは起一級の文豪は、そのいのちを知っている。起一級の文豪は、宗教的な世界をちゃんと知っている。宗教を身につけてない、宗教が溶けていないようなのほ  
第一級の文豪にはなれない。このことはゲーテ自身が言つていて、

す、  
と。だから、その点で、夏目漱石なんか読んででももの足りない。漱石さんはその世界がダメなんだ。彼は仏道の世界で本当にその世界までいかなかつたことを自分でも嘆いていま

# 「本当の悟りの世界に入れなかつた」

と。禅宗でも何でもいいですよ、とにかく、本ものにならなければダメなんだ。

だから、「キリスト教」なんて言つたつて、「教」なんて言うからダメなんだ。「キリスト道」です。教えではない。道なんだ。仏道、キリスト道です。教ではない。教えだなんて言うから、観念になつてしまふ。

「キリスト教ではどう言つてゐるか」なんて、すぐそういうことを言つう。

と言つてやる。「絶言絶慮」という言葉がある。言葉に絶し思いに絶する。絶言絶慮の神秘の世界です。

神の言葉を、天來の言葉を受けて書かれたものが聖書です。特に預言書と福音書、新約聖書、



これは全部天から受けとつた言葉です。詩篇というのはこつちから祈つている。けれども、本当の祈りは上からの声に対して、こつちからそれが反射するようのが本当の祈りなんだ。祈らせられる。祈るのではない。上からの迫りで、圧倒で、祈らざるを得ない。だから、祈りはいつも本当は讃美なんです。祈りの基調は讃美です。神を讃めたたえる。

### ●キリストからの圧倒力

「エホバはわが光、わが救<sup>すくい</sup>なり。われ誰をかおそれん。エホバはわが生命のちからなり。わが懼<sup>おそ</sup>るべきものはたれぞや。」（詩篇27・1）

これは力強いことを言つてゐる。有名なのは詩篇23編だね。

「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水濱<sup>みきわ</sup>にともないたもう。エホバはわが靈魂<sup>たまし</sup>をいかし、名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。」（詩篇23・1～3）

と。詩篇23篇は全150篇のうちで一番基調となるものです。6節の後半の

「我はとこしえにエホバの宮にすまん」

なんていう言葉は後で付け加えた言葉です。

とにかく、神からの声、キリスト中心の叫びです。旧約新約を通じて、神・キリストがその主体になつてゐる。こつち側からの叫びだけではダメなんです。神・キリストからの上からの迫り、上からの圧倒力、上からの光、それに応えるのが本当の祈りの世界です。だから、それが讃美になる。こつちからの祈りがあつてはじめて神さまが応えるのでは、そんなことではやりきりない。くたびれてしまう。上からの迫りがあるから祈れるんです。

「まだ私の祈りが本ものでないから」

とか、自分の側のことなんか問題にしてたらダメなんです。ところが、普通のキリスト教信者は自分の側の愛だとか祈りだとか、それを苦にしていて。そんなことをしていたら、いつまでたつても始まらない。

「何もありません、何も祈れません。ただ上から圧倒されるから祈らせられる」と、それでいいんだ。とにかく、キリストの中に飛び込んでしまえば、どんな問題があつても、問題が解決しなくとも、すでにそれを乗り越えている世界に入つてしまふ。人生は、相対的な問題の考え方をいつまでもしても始まらない。讃美歌の中にもあるね、

「どんなに嵐が吹いても、嵐の中でも平安だ」という。

我々はまことの牧者であるキリストに従わざるを得ない。また、そこにおいて喜びと平安と望みがある。そういう羊であるということ。我々はもちろん人間だから、一人ひとりの歩く路<sup>みち</sup>はみなそれです。決して同じ路ではない。我々の歩かせられる人生はそれぞれ特殊ですが、イエス・キリストという牧者を、導者を共通にしているわけです。

